

巻頭言

特 集

IHEによる医療情報の統合

奥 真也
Guest Editor

医療はいま謹かに情報連携の時代を迎えている。一つの病院ですべての医療が始まり、展開され、終わっていくことは最早過去のスタイルとなりつつある。ある病院を訪れた患者はその病院でひとしきり医療を施された後、より高い専門性を求めて新たな医療機関へと向かう。そのための医療に関する情報は巷に溢れている。それはあるときは人の口に膾炙し、あるときはインターネットという巨きな器を経て、専門家と社会、個人と個人の間を高速で往来している。情報の非対称性*とはかつて医療を舞台に発想され、語られた学問であったが、現在は経済学の一つの柱となった。同時に、医療は情報の非対称性を少しずつ打ち崩していく努力過程にある。

情報連携と一口に云っても、その意味する範囲はさまざまである。医療という局面の構成要素、すなわち、患者、医師、看護師、技師、…、病院、クリニック、…の組み合わせの数だけ情報連携は定義可能であるという次第である。「…」で略した中に医療情報システムは、在る。そして本特集では専ら、医療情報システム間の情報連携を扱っていく。

実はこの医療情報システムにおける情報連携は困難なテーマである。一見とっくの昔に当然に解決していそうに思えるシステム間の情報連携が、いまだに解決課題としてとどまっていることには明確な理由がある。それは、医療情報システム、より正確には、医療情報システムを構成する各サブシステムが、必要に迫られてその場その場で完成されてきたために、相互の存在を十分に認めていないことである。つまり、強い必要の産物は、理想を追求するのとは別のロジックが働いて生成されることを再認識しなければならない。

さて、Integrating the Healthcare Enterprise (IHE) はこのような文脈で育まれてきた。それぞれが個別に進化してしまったサブシステム間の道筋をあらためて整理し、場合によっては完結した技術を解きほいて再び編み、サブシステム間の連携のあり方を定式化したのがこのIHEという仕事である。前段の表現を継げば、強い必要の産物が生成された高速作業の間隙をIHEが埋めていくことになる。

云うまでもなくIHE-JはIHEの日本への適用であり、両者は子親の関係、すなわち、一段違いの層にあるが、同時に同じ層にも位置する。矛盾する命題を掲げておくが、このあたりの不得要領は、特集を読了した頃には氷解しているはずなので安心して読み進めていただきたい。

本特集では、四名の新進気鋭たる技術者にお願ひし、IHE-Jの多面を平易に説くことに力を注いだ。テーマは「放射線領域のIHE統合プロフィール」「核医学のIHE」「IHEのサクセスストーリー」および「日本IHE協会公式Webサイト」である。それぞれの著者は、IHEを含む情報技術に明るく、かつ、当然ながら放射線部門の臨床事情に著しく詳しい、いわゆるバリバリの診療放射線技師として活躍中である。これらの一連の秀作の掉尾として足るかどうか逡巡しつつ、「医療情報システムの将来像」として一文を掲げた。

本特集が、放射線部門の医療情報システム構築に関わる第一線の諸先生方および諸兄にとって有用なものとなれば、これに携わった者として天恵に謝するところ大である。

（ 埼玉医科大学総合医療センター放射線科准教授 ）
（ 東京大学22世紀医療センター健診情報学講座准教授 ）